

アルファ
サイエンス

Alpha Science

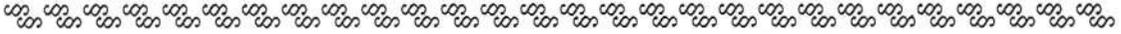
52

特集 / 色彩療法

CONTENTS

特集 色彩療法

巻頭言	3
レポート/いま、アメリカでは	4
対談/色彩療法 日原もとこさん	7
解説/色彩療法 日原もとこさん	10
紹介/いろいろな療法	12
エゴグラムでストレスチェック	14
親と子のアルファトレーニング	16
インフォメーション	17
アルファサイエンス協会のご案内	19



アルファサイエンス設立のご挨拶

脳に関する書物がベストセラーとなり、脳への関心が非常に高まっているようです。専門家たちが、これらの現象をいろいろ分析して評論していますが、要はせつかくの人生を自らの力で豊かにしようとする前向きに考える人が、それだけ多いということなのではないでしょうか。

記憶力や判断力を発揮するのはもちろん脳の働きですが、怪我や病気を防ぎ、体を健康に保つのも脳の大切な働きですし、手先を器用に動かして上手にものを作ったり、動作・表現をするのも脳の働きです。だから、脳がうまく働いてくれさえすれば自ずと健康であり、能力もいかに発揮できて幸せな人生にすることができるのです。

問題は、いかにして脳をうまく働かせるかです。皮肉なことに、一生懸命に勉強や練習をして身につけた知識や技能が、むしろ脳の働きを阻害している事実が多いのです。あしななければいけない、こうすべきだ、という考え方が脳の本来の働きを押さえているのです。

ああしたい、こうしたい、という希望と、それが実現できたときの喜びや満足感が実感として心の中を支配するようになると、脳は驚くほどの力を発揮してくれて、結果として健康となり、さまざまな能力が発揮できるようになるのです。

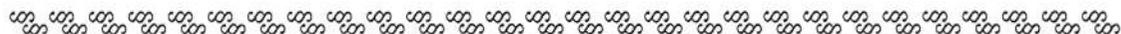
私は長いこと脳のこのようなメカニズムを脳波を指標にして観察してきましたが、アルファ波が優勢な脳の状態こそ健康を維持し、さまざまな能力が発揮できるコンディションになっていることをつきとめました。

この事実を踏まえてSRP(Self Regulation Program)セミナーの形で多くの方へ伝え、特に企業の創造性開発を目的とした社員研修や、スポーツのメンタルトレーニングで活用していただいて素晴らしい成果をあげてきました。

この度SRPをさらに多くの方に伝え、仕事や勉強、人間関係の改善や健康維持に役立てるべくアルファサイエンス協会を設立することになりました。公開セミナーや企業研修でSRPセミナーを受講した人を正会員として迎え、より研鑽を深めて指導員になりたい人のためのインストラクターコースも充実させていく所存です。詳細は最後のページのアルファサイエンス協会のご案内をご覧ください。

これまでご支援、ご愛読いただきました季刊誌「アルファサイエンス」は、これを機会に紙面を一新にアルファサイエンス協会の機関誌として継続発行されることになりました。引き続きご愛読くださいますようお願い申し上げます。あわせて、アルファサイエンス協会への皆様の積極的なご参加をお待ち申し上げます。

平成8年7月
アルファサイエンス協会
会長 工学博士 志賀一雅



リポート

いまアメリカで… 志賀 一雅

アリゾナ州フェニックスで開かれた、ホリスティックメディスン国際会議に、マンドーゴナム博士（ロスアンゼルス・ドール医科大学教授）との共同研究の内容を発表するために参加し、斯界の中心的な役割を果たす研究者と話をすることができましたので、その概要を報告します。

▼代替医療の研究プロジェクト

1990年から、アメリカで国家規模の代替医療研究プロジェクトがスタートしました。近代医学の進歩は、多くの病気を克服して、私たちに健康で幸せな生活を約束してくれていますが、一方では難病が増えていることも事実ですし、薬害もかなり深刻な社会問題となっています。

そこで、近代医学を否定するのではなく、その補間的な役割としての代替医療の研究をスタートさせたわけです。したがって対象となるものは幅広く、近代医学にとりのこされた地域で実践されているものも含め、あらゆる医療行為となります。

フェニックスで開催されたホリスティックメディスンの国際会議ではそのせいか、祈とう師のような異様な姿をした人のプレゼンテーションやワークショップ、実演展示などがあって、およそ学術会議とは程遠い雰囲気がかもし出していましたが、参加した人の中には高名な学者もいて、アメリカのいかにも自由な国の特徴をか

し出していました。

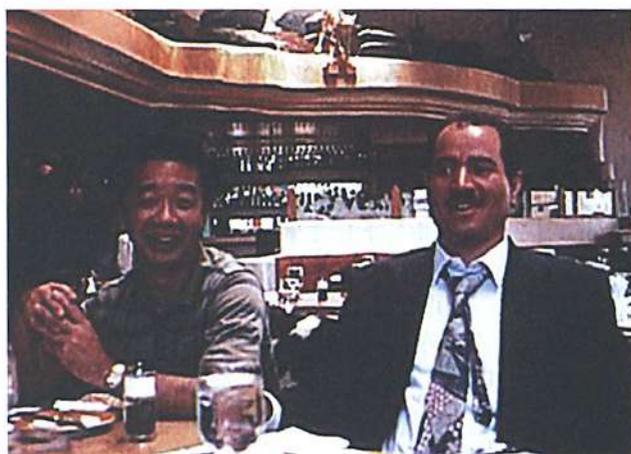
マンドー・ゴナム博士の専門は細胞の免疫機構で、NK（ナチュラルキラー）細胞の活性化の研究は高く評価されています。これまでの研究は主として薬物によるNK細胞の活性化でしたが、効果的な薬は高く、患者に経済的な負担が大きいことと、どうしても薬害が避けられないので、薬物以外でNK細胞の活性化を図る方法を捜していた、とのことでした。

たまたま1994年に横浜で開催されたエイズ国際会議で来日し、日本の伝統的な瞑想法や気功法、手かざしなどによる病気治療に興味を持ち、それらの手法を持ち帰って実験したところ、メカニズムは解明できないものの、祈りが、手かざしが、明らかにNK細胞を活性化させ、しかも相手にも影響を与えている、という事実を観察したそうです。

さらに詳細に観察すると、祈る人の気持ちが直接NK細胞に作用するように思える現象（インビロン実験＝試験管に血液を入れ、その血液に意識を送る）もあるものの、相手の脳が介在して起こると思われる現象が強いことも分かりました。もちろんプラセボ効果のような心理的な影響は排除しての実験です。そこで、お互いの脳波がどう影響しあっているかを観察して、NK細胞への作用のメカニズムを解明しようという計画を立て、共同で研究していくことにしたわけです。

▼BMインターフェイスが活躍

この種の実験では、臨床脳波計のような大がかりな装置を使ったのでは、患者への心理的な負担がありますから、できるだけ簡便な、しかも正確に計測できる装置が必要です。パソコンを使ったBMインターフェイスは、まさにこの要望を満たすものとして着目されました。



マンドー・ゴナム博士と共に



ラリー・ドッシー氏

ここで問題なのは、アメリカで多く使われているパソコンの標準化されたOS(オペレーティングシステム)でBMインターフェイスが動作しなければなりません。すでに開発したシステムは日本のパソコン用ですから、日本語版Windows3.1やWindows95上でしか動作しません。英語版windowsに移植しなければなりません。技術的な困難はありませんが、コストがかかります。しかも、かけたコストは、商品開発と違って回収ができません。

幸い、この研究にスポンサーがついて、英語版ソフト開発ができ、現在ドール医科大学やNIH(アメリカ国立衛生研究所)で活用してもらっています。実験結果については遠からずこの紙上でも紹介できることと思います。

フェニックスのホリスティックメディスン国際会議でノート型パソコンを持参し、約300人ほど集まった会場で計測を実演し、投射型のディスプレイで計測結果がリアルタイムで見ることができるようにして説明したために、会場から計測希望のボランティアが次から次ぎと現れて、多くの関心をひきつけたようです。

▼[エネルギー医学]という考え

ところで、アリゾナ州フェニックスからそれほど遠くはないところにニューメキシコ州アルバカーキー(写真集で一躍有名になった)があります。そこに在住のアメリカのマスコミでは高名な医事評論家のラリー・ドッシー氏を尋ねて、いろいろ歓談するチャンスがありました。

ドッシー氏は、かねがね「エネルギー医学」の考えを表明して、現代のサイエンスでは検証できないけれど、事実として起きている現象に注目して、第三の医学を構築しようとしています。

たとえば「祈り」が、祈る側は当然にしても、祈られる側に何らかのエネルギーが伝わり、心身の状態に強い影響を与えている事実があります。遠隔治療と呼ばれているこの種の現象は、もちろん科学的に説明できないために否定されていますが、ドッシー氏は世界中の文献を集め、厳しくコントロールされた実験室内での研究に着目して、現象解明に意欲を示しています。

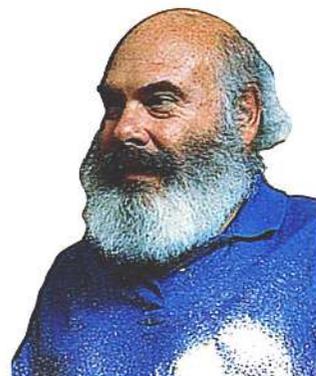
問題は、エネルギーという言葉を使うときには、物理学で一般に使われているエネルギーの概念と、かなり質が違う点に注目しなければならない、と氏は強調しています。

つまり、遠隔治療のような現象は、アインシュタイン以来の物質とエネルギーは等価であり、かつそれらは総合的に保存されている、という物理学の常識から、かなりかけ離れているのです。

物理学のいうエネルギーの伝播は、距離が遠くなるにしたがってパワーが落ちる(距離の二乗に逆比例)。ところが遠隔治療の効果は距離に関係しない。目の前でであろうと、地球の裏側であろうと同じように作用する。しかも、どんな電磁エネルギーをも通さないように鉛で覆った部屋に患者を入れて、外から治療を行っても、同じように効果がある。だから、もしエネルギーという言葉を使うなら、今までのエネルギーの概念を改めなければならない、と強調しています。

▼従来の医学との共存

ドッシー氏によれば、アメリカ国立衛生研究所(NIH)に新しく設置された「代替医学研究室」が取組んでいるテーマの一つに「認識の問題」があるそうです。観測された現象が意味のあるものかどうかを、どうやって判断した



アンドリュー・ワイル氏

らしいか、という問題です。

二重盲検法は信頼できる手法とされていますが、かなり厳しく管理された条件で二重盲検法によって効果を調べた実験の中にも、研究者が事前に期待した通りの結果になったり、影響を受けたりしているものがあるというのです。

このような、研究者の意志が二重盲検法の網を破ってしまうときには、どうしたらいいのだろうかとか真剣に考えています。つまり科学的方法の意味について考え直す必要が生じていることを強調されていました。

▼癒しのメカニズムを本格的に解明する

ホリスティックメディスン国際会議でゴーナム博士と共同で発表した分科会では、アンドリューワイル博士が司会をされました。

アンドリュー・ワイル博士は、アメリカでベストセラーにもなった Spontaneous Healing の著者で、ごく最近日本でも翻訳本が角川書店から「癒す心、治る力」上野圭一訳で出版されましたから、ご存じの方が多いと思います。

この著書でも強調されていますが、心の状態が治癒力を高めるのに大きな役割を果たしている、ということです。そして、治癒力が発揮できずに病に苦しむ要因として考えられるものに、1 エネルギー不足、2 循環不全、3 浅い呼吸、4 防衛障害、5 有機物質、6 老化、7 心理的要因、8 質的問題の8項目を取り上げています。



ラリー・ドッシー博士と共に

これらはワイル氏が長いこと臨床に携わってきた実感で、それを科学的に検証するための努力をされている、とのこと。

目下、代替医療の対象となるさまざまなものを調査し、癒しのメカニズムを探りながら共通するものを抽出し、それらを統合して普遍的なものにしようと努力されています。その中にはサイキックヒーリングのような、メンタルな現象を飛び越えて霊的な領域まで含まれるので、現実には科学的な検証が困難なようです。

その中であって、施術者や患者が自覚できないが、明らかに作用していると思われることに対して脳波的に観察することの意味を高く評価し、今回のマンドー・ゴーナム氏との共同研究に大きな期待を寄せてくれました。

▼国際シンポジウムを提案する

その後ワイル博士は二度ほど来日され、日本の古くから伝わる手当てや遠隔治療など、「気」にかかわる現象に注目して、まずは現象論的に整理し、その中から本質を抽出することが事実を明確にする最短距離のようだ、と感想をもらわれていました。そして日本で、例えば「ハンドパワー」のようなテーマでシンポジウムを開いてはどうだろうか、とも述べていました。

幸いワイル博士の翻訳本が、上野氏の名訳あって評判が高く、多くの読者がいることですから、シンポジウムの開催は決して夢のようなことではなさそうです。

日本では、医療制度の制約があり、医学の専門家たちとの融合が難しいのですが、自律訓練法が治療体系の重要な位置を締め、いきがい療法が多くの病院で実践され、ヨガや瞑想法が日常生活に溶け込むようになれば、アメリカでいう代替医学の進歩が促されると思います。

最近、SRPセミナーを受講される内科や皮膚科、整形外科、歯科のお医者さんが増え、ご自身の問題とか患者さんの問題とか参加の目的はさまざまですが、異口同音に、これからは患者自身の心身のセルフコントロールが、治癒効果を高める、という事実が認められるようになるでしょう、と感想を述べています。

対談…

❖ 色彩療法 ❖

東北芸術工科大学 教授

日原もとこさん

❖ 通産省工業技術院製品科学研究所(元産業工芸試験所)に長らく勤務され、色彩の研究をされてこられた日原さんが、東北芸術工科大学で学生を指導するかわら、この度、テオ・ギンベル氏の著書「色彩療法」を翻訳出版されました。

内容がきわめてユニークなので、さっそく山形へ先生をお訪ねし、いろいろおもしろい話を伺うことができました。

❖ 色彩学は奥深い学問

志賀 久しぶりに先生にお目にかかれるので楽しみにして参りました。毎年印象的な年賀状をいただきましてありがとうございます。今日はいささか不勉強で申しわけありませんが、色彩に関するお話を伺わせて下さい。

日原 遠方までおいでいただいて恐れ入ります。せっかくですから、はじめにこの大学をご案内しましょう。

…しばし大学のキャンパスの中を歩きながら
話がはずむ……

いま私は色彩学と応用人間工学を教えているんです。この階段教室は500人位入りますが多勢の学生を相手にすると結構エネルギーが必要ですね。でも、熱心な学生が居ると張り合いがあります。

志賀 色彩学というのは、どのようなことを教えるのですか。色彩心理とか……いまはやりのカラーアナリシスやカラーコーディネートといったことでしょうか。

日原 もちろんそのようなことも含まれますが、もっと幅広く、色の基礎理論から歴史文化までと申しましょうか…。4年に一度、国際色彩学会が開かれるのですが、そこで取り上げられる研究テーマがその範囲と云えるかもしれ

ません。物理学・化学から生理心理学までの幅の広いものです。

志賀 そもそも先生が色彩学を専攻されるようになったきっかけは何ですか。

日原 産業工芸試験所に入って、そこは日本で初めてのデザインの指導機関でして、私はデザイナーでしたが、いろいろな企業のデザイナーを養成するという役割もあって、デザインの分析的な仕事とか、データづくりとか、標準化とかが大切な仕事だったわけです。その中に当然ながら色彩デザインの問題もあるのですが、当時はまだ学問としては吹けば飛ぶようなものでしたから(笑)、ゼロから築き上げなければならぬ感じでしたね。

志賀 いわば草分けの時代とでもいいでしょうか、先生が色彩学の創始者でもあるわけですね。

ところで、デザインと言うと、自由な発想の中にこそ素晴らしい創作があるのでしょうかけれど、現実には材料の問題だとか、加工技術の問題とか、法律上の制限だとか……いろいろ制約があって、そのジレンマに悩まされることはありませんか。

日原 そこはいかに妥協できるかの工夫ですから柔軟性の問題ですよね。実際にはデザインしなければならないわけですから…、サイエンスとしての心理生理学的な研究成果をいかに効果的に活かすか、そのパイプ役を目指していました。

❖ デザイナーの要求が技術を進歩させる

志賀 ととき頑固なデザイナーがいますよね。絶対に妥協しない。だから喧嘩になる。でもそういうデザイナーが頑張ってくると、材料や製造技術が進歩するんですね。物分かりのいいデザイナーだと、技術屋は楽です

が進歩がなくなる。(笑)

分野が違いますが、私は昔半導体の製造技術に携わっていて、LSI(大規模集積回路)を開発していましたが、頑固なデザイナーに随分悩まされました。絶対に譲らない。仕方なく要求通りのものを造るように努力したのですが、半端な努力ではできませんから恨み骨髄でした。でも完成したときには半導体国際会議に発表できるような素晴らしいものになった。口では言わなかったけれど、そのときは頑固なデザイナーに心の中で感謝したものです。(笑)

ところで、先生は「色彩療法」の本を出版されましたが、そのことをぜひお聞きしたくて…。

日原 テオ・ギンベル先生のお書きになった *Healing Through Colour* を翻訳したんですが、正直申してとても難解でした。この本に出会ったとき、何か凄いヒントが得られそうな気がしてわくわくしましたが、いざ読み進むと実に難解で、もし私自身に少しでも神秘体験がなかったら投げ出したと思います。

カラーリストとかカラーセラピストという人たちがいて、向こうではちゃんとしたセミナーでトレーニングをつみ、市民権があるのですが、私は色彩療法が客観的にどの位説明できるものなのか、ということに興味があって、色彩の心理生理的な効果を確かめたくて翻訳をお引き受けしたんです。



❖ 色刺激が体に影響を与える

志賀 色彩が心理的に影響を与えるという客観的な事実があって、だとすれば心身医学的な立場から当然ながら生理的に影響を与えてセラピーが成り立つという図式になるけれど、この本を拝見すると、どうもそうではなく、色彩刺激が直接生理的に影響を与えている、というんですね。そこに惹かれたんですが、目で色を認識するだけでなく、皮膚の細胞レベルでも色を認識する…。

カメレオンが木の葉の上に居るときは緑色の肌になり、枝にしがみついているときには茶色の肌が変わる。肌の色が周りの色と同じになれないときは移動する。恐らく目からの情報だけではこのような反応はできないから、細胞レベルで色彩を認識して生理的に変化しているのではないかと思いたくなるんですが…。この本からそのような解釈をするのは飛躍しすぎでしょうか。

日原 そこまでこの本はふれていませんが、それ以上の事を示唆しているようです。以前に私たちの行った実験で、被験者を目隠して、赤色の光を当てると気分が高揚してきて脈拍が速くなり血圧が上がる、青色の光を当てると落ち着いて血圧と脈拍が下がる、という傾向がありましたから、目以外の細胞が色を認識する可能性は否定できませんね。皮膚細胞も受容器官になっているのですね。

もちろん目で見たことの方が変化がはっきりしていて、実は志賀先生のところから購入した脳波測定装置を使いカネボウ美容研と協同で随分実験したんですよ。

ところが、ギンベルさんのところではこういう客観的な話もありますが、もっとセラピストの霊的資質が重要視されるようです。シュタイナーの影響を強く受けていて、国際色彩学会などで発表される研究レベルとは少し次元が違うのです。でも、私個人では現段階では科学的に説明できなくともギンベルさんは色彩の真髄を先取りしている方だと信じています。

❖ ギンベル邸に滞在して直接指導を受ける

志賀 先生はこの本を翻訳されるために、わざわざギンベルさんのところを尋ね、しばらく滞在されて不明なところを質問されたり、色彩療法を実際に体験されたんですね。

日原 ええ、たまたま1993年にブダペストで国際色彩学会が開かれた機会を利用して、英国に足をのばし、ギンベル先生のハイジア・スタジオ研究所を訪問したんです。ギンベル先生のお考えは、生き物は自然光のスペクトル

の刺激をバランスよく受けていなければいけない。そのバランスが欠けることによって病になる、というのです。だから、欠けているスペクトルの色光をあてることによって癒される、というんですね。頸椎から脊椎、腰椎にそって色光スペクトルの正常な配列があつて、静かに瞑想し無心の気持ちになると、二本の指を使ってその皮膚感覚で配列の異常を感じることができるのだそうですよ。私は頸椎と腰椎の4番目に異常を感じるといわれました。それを補う色光を当ててるんですね。(実際、私は車の事故でその2箇所がつぶれているのです。)

志賀 エドガー・ケーシーのリーディングに似ていますね。岡山健康学院の山崎佳三郎先生は色と造形のイメージを相手に送り、多くの患者さんを救っているんです。行動を通じて相手のことを思うと、何らかの作用力が働く。そのとき自然のバランスのいい光や音刺激が加わると効果が高まる…、そんな気がするんですが。

❖もっと自然に接して欲しい

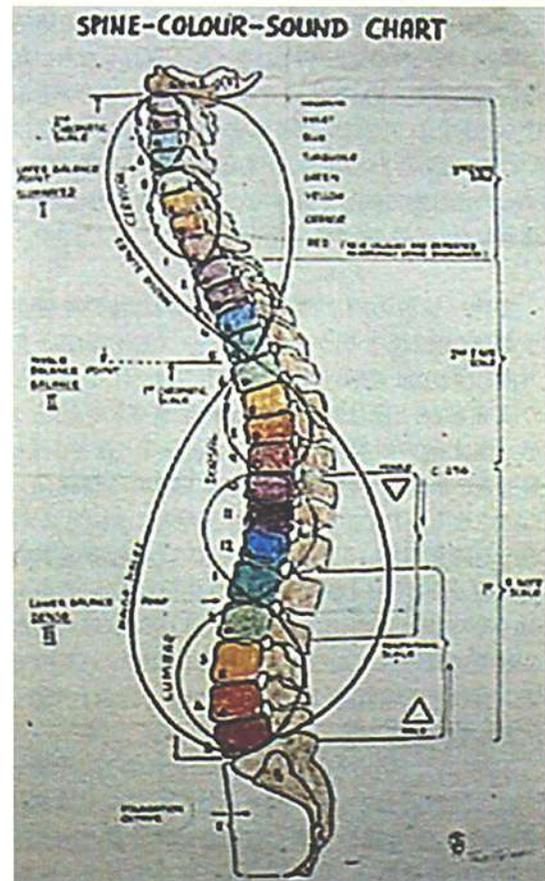
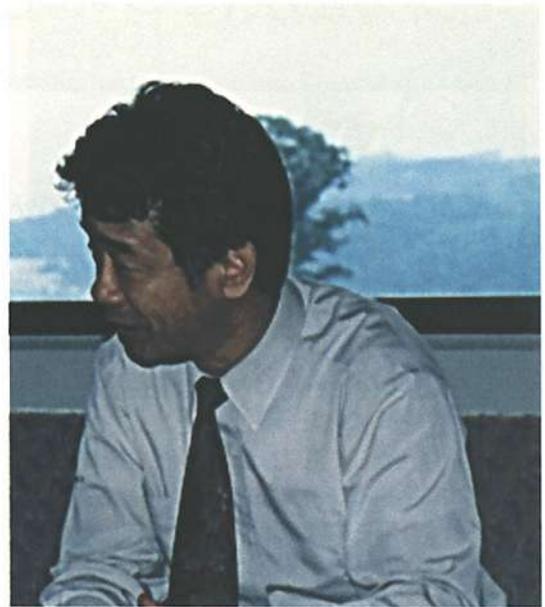
日原 そうですね。山形に来てつくづく思うんですが、この美しい自然からの刺激が心身の健康に一番いい。それを大切にしたいのですが、どんどん環境破壊されていく。残念でたまりません。人工のものは所詮要素の積み重ねでしかないのですから。

志賀 資本主義社会ですから、どうしても経済の原則が優先される。ストレス解消のために自然の景色に触れるゆとりがないので、仕方なくビデオの映像やCDの音で擬似体験をする。バーチャルリアルティーによるストレス解消システムまで売り出す電器会社が現れたんですよ。

ブラウン管に写る画像は、ハイビジョンで綺麗だといくら自慢しても、所詮は赤と緑と青の光のスペクトルしか出ていないのです。目に鮮やかに写るひまわりの花の色は、自然界では確かに黄色のスペクトルだけけど、ブラウン管では青と緑のスペクトルの組み合わせで黄色に見せているわけです。皮肉にも、その方が自然界のひまわりより美しく見えてしまうんですね。

このような人工的な疑似体験ばかりしていると、自然空間に身を置くことができなくなりますよね。牧場がこんなに臭くて汚いとは思わなかったと逃げ出すわけです。人工空間に順応したロボトミーに成長してしまう。ギンベルさんのいわれるように、われわれは自然のバランスのいい光を受けていないと、心も体もどんどん病んでいく…、そんな気がしますね。

今日はいろいろありがとうございました。



色彩療法について

東北芸術工科大学

教授 日原 もとこさん

❖SMC が招いた第二の人生

かれこれ7、8年は経つかもしれません。私がSMC（シルバ、マインドコントロール）を受けたのは他でもなくこの脳力開発研究所のセミナーにおいてでした。以来ご縁が途切れていた中、所長の志賀氏が突然山形へ訪ねて来られたのですからまさに驚天動地の心境でした。もっとも私が拙書「色彩療法」なる訳本をお送りしたという経緯はあったにせよ、もとを質せば、SMCが動機となって完成したようなもの。だから潜在意識では当然起こるべくして起こったのであって、不思議現象でも何でもないのであるかもしれません。そんな訳で最近益々すべては偶発的に起きることなど一つもないという確信が深まるばかりです。

5年前に私が40年近くも住み慣れた東京に家を残り、縁もゆかりもない東北の地・山形に、まるで第一の故郷のごとくに居ついてしまったことも（ちなみに私は広島生まれ）SMC体験が後を引いているのだと信じています。何故ならば、あのカリキュラムの中には「マインドの鏡」というのがあって、自分の願望をイメージ上の鏡に映してみるトレーニングを多少なりとも体験したからなのです。

当時、筑波の国立研に在職していた私の仕事が十数年も前から、国が常に要求してくる先端的研究方向とはおおよそかけ離れたものになり（これは殆どの研究者が一度は味わう窓際族的屈辱といえましょう。）国立研の研究員に対しては私企業と違って誰も肩叩きが出来ない代わりに、これが強力なる精神的ストレスとなるのです。さりとて間口が狭く、つぶしの利かない研究員という立場には、おいそれと再就職の話が転がっているわけではなく私の潜在意識下では、もう一人の私が強烈に「自分の人生の流れを変えたい。変えなければならぬ」と嘯き続けていたのです。今にして思えば、これが「マインドの鏡」でなくして何でありましょう。

とはいえ、どういふところに行きたいという具体的なイメージがなかなか湧いてきません。ただ私は漠然と全く違った価値観の世界で働ける場所を夢見て、ひたすら「競争原理、経済優先思想に毒された世界

から脱出したい」と念じていただけなのです。そこへ山形の新設4年制大学開学の話が飛び込んできたのです。しかし、これには表層意識で抵抗がなかったといえば嘘になるでしょう。というのも当時の私は多分に幼少の頃から刷り込まれていた「西高東低」現象に何ら疑問をもつこともなく、東北一帯についての無知も甚だしいものがあったからです。ところが虚をつかれた私は一旦、返事を保留したものの、一も二もなく心の奥底で「これぞ正解!」と電撃的ひらめきを感じていました。

❖縄文の精神文化

さて、山形に腰を降ろしてからというもの、それまでの体験とは明らかに異なった自然景観、地形風土に観るもの聴くもの皆珍しく夢中だったのです。その違いは一体何処から来るのか？まる一年間はありとあらゆるものにアンテナを張った挙句、突き詰めたその正体とはこれまで触れることもなかったこの土地の基礎文化：縄文の霊気でした。それからというもの自分自身の原始的感覚器を通じて縄文文化が発信するメッセージの虜です。

山形の高阜という地域には一万年も縄文人が暮らしていた洞穴が幾つもあるのです。あまり人が訪れた様子もなく、深い草むら分け入った丘陵の岩陰に、かがり火の煤か獣肉を焼いたりしたらしい黒変した痕跡が洞穴の壁面にこびりついていました。紛れもなく縄文人が棲んでいたという生々しい感覚に襲われ、私は引き込まれるようにその洞穴へと潜り込んでみました。そしてこの縄文の小宇宙から逆に20世紀の外界に向かって胡座を組み瞑想に耽ったとき、私の中で何らかの意識変革が起こったに違いありません。

縄文人は狩猟採取民族であったが故に、野蛮で恐ろしく未開で...という従来のイメージがいかに偏見だったかはこの土地を訪れてみると氷解します。彼等は野蛮どころか自然破壊を押し進めてきた弥生人の末裔たる現代人よりもはるかに神を畏れ敬い、自然の恵みに感謝し、万物共生思想をもつ心優しい人々だったのです。特にこれらの洞穴からは古いさらばえ

たり、傷ついた犬の骨が人骨のそばに葬られていたり、家族同然の待遇を受けていた痕跡が発見されました。そればかりかこの地方には古くから続いている犬の宮、猫の宮という神社があり、草木塔まであるのです。(草や木のお墓があるのは全国でも此処だけなのです)

❖ 忘れられた不可視の世界

「歴史は螺旋状に繰り返す」といわれます。実際、世紀末にははるか昔の記憶が姿を変えて新しい潮流を作ってきました。すでに、西洋的自然科学の分野でも20年も前から意識革命が起こり、ニューエイジ・サイエンス運動となって、形而上学の研究が表出しています。実験的検証が不可能な東洋思想が根底にあり、深層心理や脳の仕組みにメスを入れた「明在系」や「暗在系」の話が出てきます。それは目に見える世界と目に見えない世界を不可分とする思想です。

ところで縄文人にとってこの「明在系」と「暗在系」は表裏一体の世界だったのかも知れません。山や草や木、路傍の石にまで靈魂が宿り、山を神と崇めた事実は彼等が不可視の世界のメッセージを別の感覚器でキャッチしていたのではないのでしょうか？

「色彩療法」の著者ギンベル氏は次ぎのように説明します。可視の世界から不可視の世界の諸現象は固体的存在から液体的存在、そして気体的存在、靈气的存在になり、その順序にしたがって周波数が細くなっていきます。可視的存在でもっとも周波数の繊細なものが色彩です。そのことは受け皿である人間の受信装置もその周波数に調整されなければ、効力を発揮しないことになり、その点、音は色と隣り合せて存在するけれど色よりも密度が高く、物質化しやすい性質だと説明します。例えば人間の脊柱は全て色に対応しており、紫(前額部)は赤(尾底骨部)に較べて密度が低く、赤が象徴する肉体的性質からもっともかけ離れた精神的性質を象徴する色だと判断しています。そして頭頂部にあるマゼンタ(赤紫)は靈的象徴の最高位を示す色なのです。

色はこのように非常に精神的、靈的存在であるが故に、音や香のように癒しの媒体としての効力を期待するならば、人間側の靈性(古代人はかつて誰でも備えていた繊細な受信装置)を高めて、色のメッセージを受けとる必要があるのだそうです。そこで古代に



邸内にある礼拝堂で、毎朝カラーイメージ瞑想を行うT.ギンベル氏

おいて色は音や香と同等に癒しの手段として用いられていたのですが、現代では音や香がミュージックセラピーあるいはアロマセラピーとして見事に蘇り、市民権を得ているのに対して何故「色」が出遅れているのかという疑問があります。

私の見解はギンベル氏が言うとおり、音は物質化しやすい。すなわち、それだけ癒しの結果が人に意識されやすく客観化しやすいのだと考えるのです。その点、色は音よりもっと身体の深いところ(細胞レベルと潜在意識)で確実に影響を受けているのですが、微細な周波数であるが故に、現在の科学では客観化しにくいという点が考えられます。

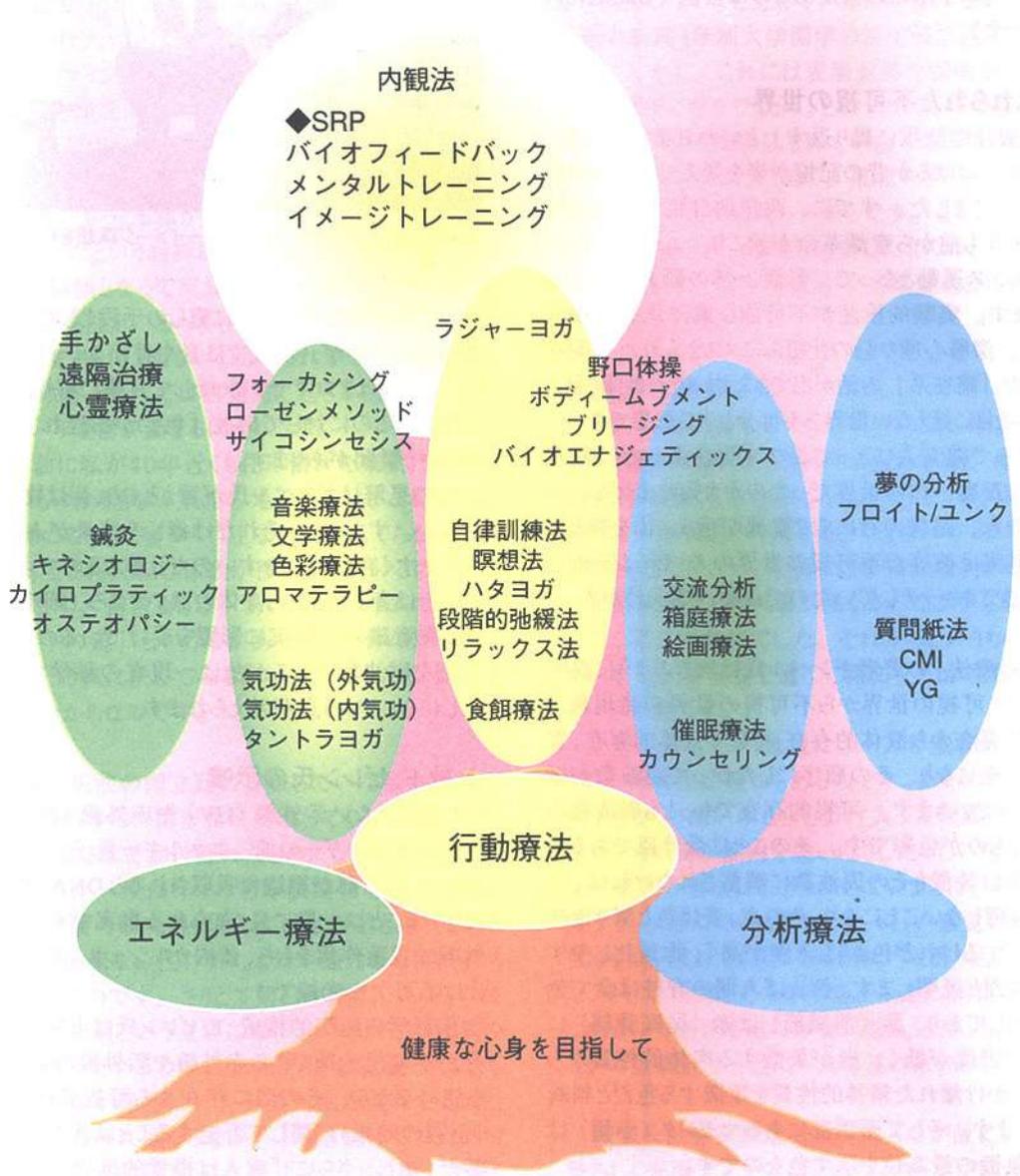
❖ 故F.ビレン氏の示唆

目に見えない紫外線(UV)や赤外線(熱線)、放射線はエネルギーの塊(エネルギー量子)の流れであり、その一部が細胞に吸収されるとDNAを傷つけたりすることは一般に良く知られる事実です。一方紫外線は殺菌作用をもち、体内カルシウムの生成などには不可欠な光線です。

色彩学の国際的権威・F.ビレン氏は「今日の医学界が不可視光線である赤外線や紫外線の治療効果を認めながら、その間に存在する可視光線の効果(色彩の効果)に関して否定することは甚だ矛盾した話だ」とし、さらに「盲人は視覚的世界のみに暗いのであり、光は身体全体に及ぼす放射エネルギーを吸収しているのだ」と言っています。

私たちは、日常の暮らしの中で無意識に心地よい場所を選び、洋服の色を選んでいきます。それが色や光のせいだとは誰も気付かずに。(日原もとこ)

● いろいろな療法



色彩療法を紹介するにあたって、この際いろいろな療法について整理してみようと編集部で調査してみたのですが、世の中で語られている療法があまりに多く、しかも原理や体系の不明なものもありますので、わかる範囲で紹介することにします。

原則として編集部で体験したものに限定しますが、一部その道の専門家に解説してもらったものも含みます。療法の基本的な考えは、次の3つに大別されると思われま

1、分析療法：

統計的なデータを基に、クライアントが体験したこと、もしくは考え方や行動の特徴を分析して本人に伝え、意識や行動の変容を図ろうとするもの。

フロイトやユングの夢分析がその代表。どのような夢を見たか、その夢の内容を分析してストレスの原因を明らかにし、その原因を取り除くことによって、ストレスから生じるさまざまな疾患を治そうとするもので、意外に効果的なので評判になった。しかし、現在はあまりこの手法を採用している治療者を見かけない。

それに対し、エリック・バーンの交流分析、エゴグラムは、質問紙法や面接などによって、クライアントの無意識に出てしまう考え方や行動の傾向を明らかにして日常のストレスを緩和させようというもので、比較的手軽に行えるので心療内科ではよく利用されている。ただし、統計処理されたものでなければ分析してもあまり意味はない。

この他に、あまり体験できるチャンスはないが、箱庭療法や絵画療法がある。絵を描いたり、箱庭で自分の情感を表現し、それを専門家が分析してアドバイスを受けるのだが、童心に帰ったような気分で表現するので、行動療法としての側面もある。

2、行動療法：

文字通り行動を通じて治癒力を高めようとするもので、趣味やスポーツに没頭するのも広い意味で行動療法になる。趣味豊富な人は健康であることがそれを物語っているが、大切なことは行動を通じて楽しみ

や満足感、期待感が高まらなければならない。

この範疇に入るものはたくさんあるが、最も信頼されて世界中に広がっているものが自律訓練法。ドイツのシュルツが構築したもので、覚醒自己暗示に伴う体の反応への気づき練習と条件付けが基礎になっている。いわば頭寒足熱の健康な状態へ導く練習と考えていいだろう。

ヨガや座禅の瞑想法も、調身・調息・調心の原則を忠実に実行することにより頭寒足熱の状態を作り出すものであると考えられる。

よりダイナミックな方法としてバイオエナージェティックスやブリージング、ボディームovementがあり、非日常体験を通じて新たな心理状態を作り、その結果が体に反映してくるのを狙っているものと思われる。この種のもは心身ともに100%参加しきらなければ効果は期待できないし、疑いや依存心があると逆効果の恐れもある。

3、エネルギー療法：

他から刺激（エネルギー）をもらい、それによって自分の治癒力を高める方法で、体で感じ取れる（目に見える）ものと、感覚的には分からない（目に見えない）ものに分けられる。

前者の代表はアロマセラピーや音楽療法、文学療法などで、穏やかな刺激のようだが、受け手の状況（過去の体験）によっては激しい作用力を持つので、十分にトレーニングを積んだ専門家の指導が必須となる。

目に見えないものの代表は気功法で、「気」の実態が解明されていないものの、その作用力の強さは驚異的である。手かざしや遠隔治療、サイキックヒーリングなども外気功の範疇に入るものと思われる。両者の中間に属するものに色彩療法が位置づけられるが、その本質は不明。

オーリングやキネシオロジー、オステオパシー、波動など、その原理やモデルがいろいろ提唱されているが、現代科学との融合性においてまだ距離があり過ぎて、一部の愛好家たちの活用の範囲を脱しきれない感がある。

エゴグラムでストレスチェック

1

アルファサイエンス協会 / 矢澤 敦臣

ストレスにさらされている現代人

パソコン通信のメニューの中に「クリッピング」というサービスがある。キーワードを登録しておく、各新聞および通信社が提供するニュース記事に、そのキーワードが含まれていると、自動的に配信されてくるサービスである。ここに「ストレス」という言葉を登録してみると、1日当たり2～3件、多いときには6～7件の記事に、必ず「ストレス」という言葉が登場していることがわかる。現代社会がいかにストレス社会であるかを物語る事例といえよう。

ストレスに関心を持つ

「イミダス」にはストレスについて「物理化学的・精神的・社会的なものを含め、人体に対して間脳から脳下垂体、副腎と続くシステムを通じて影響を与えるものをストレスャー(stressor)といい、それに影響を受けている状態をストレス状態という」と解説がある。もう少し具体的にいうと、人間関係や仕事上のトラブル、結婚や転職・転勤による環境の変化などがストレスャーとなり、ストレス状態をつくりだしているのだ。

ときどき「私はストレスがないから…」という人がいる、現代社会においては、ストレスなしで生活していることなど皆無に等しい。むしろ、意識では感じることでできないストレスが溜まっている危険性もある。ストレスがないから(ストレスを感じないから)こそ、ストレスに関心をもつべきである。それではストレスにうまく対処していくにはどうしたらいいのだろうか。

ストレスに対処するには

ストレス状態は人間だけではなく動物にも発生するという。たとえば外敵から襲われたとき(外界からの刺激)などは、脈拍・血圧がともに上昇し、瞳孔が開き、血中の糖分が上昇するという反応(心身への影響)が現れるが、この反応は闘争や逃走という激しい運動をとることで消える。

しかし、我々人間のストレスはそう簡単にはいかない。多少のストレスであればスポーツなどで解消できるが、多くの場合、筋肉運動をとる程度では消散できるものではない。心身の健康を維持していくには、意識的にストレスをコントロールする必要があるのだ。

心身の緊張は何らかのかたちでほぐす必要があるがその一つの方法として考えられるのが、リラクゼーションである。このリラクゼーションを図る手段として禅やヨガ、瞑想などを上げることができる。またドイツの精神科医J・H・シュルツの自律訓練法は段階的にリラクゼーション感覚が修得できる。

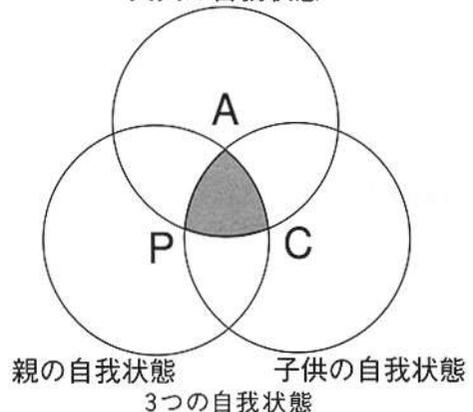
ただし、実際にリラックスした状態がどういうものであるかを知るには、主観的に判断をしなければならない。そのため、それを習得するのに時間がかかったり、『ただ単に体がだらへんとなった状態がリラックスしている』というような判断をしたりで、なかなかうまくいかないケースも見受けられる。(理想的なリラックスとは、不必要な緊張がなく、適度の張りがあり、意識は集中している弛緩集中の状態のことをいう)。

そこで、リラックス状態を客観的に判断する手法となるのが、バイオフィードバック法である。装置や機械を用いて、脳波、筋電図、皮膚温などをモニターしながら、心身の緊張緩和のコツを習得するのだ。本来ならば何年も修行を積んで得る瞑想三昧の感覚などを、機械からの音や光などの信号で知ることができるので、スピーディーにコツをつかむことができる。

ストレスの要因を知ろう

読者の中には、上記のようなリラクゼーション法を実践されている方は多いのではないだろうか。そこで、このコーナーではもう一步踏み込んだストレス対処法として「交流分析」について考えていきたい。

大人の自我状態



交流分析はアメリカの精神科医、エリック・バーンによって1959年頃から提唱されはじめた。精神分析の口語版ともいわれ、誰にでも簡単に理解できる自己分析法として広まっている。バーンは1970年に他界するが、その後直弟子のジョン・デュセイによって、「エゴグラム」へと発展していくことになる。

ストレスは、多くの場合、人と人の交流によって生じる。つまり考え方や行動様式のギャップから発生するものだ。そして人それぞれの考え方や行動様式には共通した特徴がある。それはその人の心の奥に持っている自我に影響されているのだ。「エゴグラム」では、この自我を次の3つのパターンに分類する。

1【親の自我状態】

批判的な親の自我状態 (Critical Parent=CP)

理想、良心、偏見などの、価値判断、道德、倫理感などの父親的厳しさを持つ自我状態。

保護的な親の自我状態 (Nurturing Parent=NP)

共感、思いやり、保護など子どもの成長を促進させるような母親的なやさしさを持つ自我状態。

2【大人の自我状態】 (Adult=A)

事実に基づいて物事を判断する自我状態。

3【子どもの自我状態】

自由な子どもの自我状態 (Free Child=FC)

親のしつけの影響を全く受けない、感情や要求を自由に表現できる自我の状態。

順応した子どもの自我状態 (Adapted Child=AC)

成長過程において親の影響を強く受け、親の愛情を失わないよう、子どもなりの処世術に順応した自我の状態。

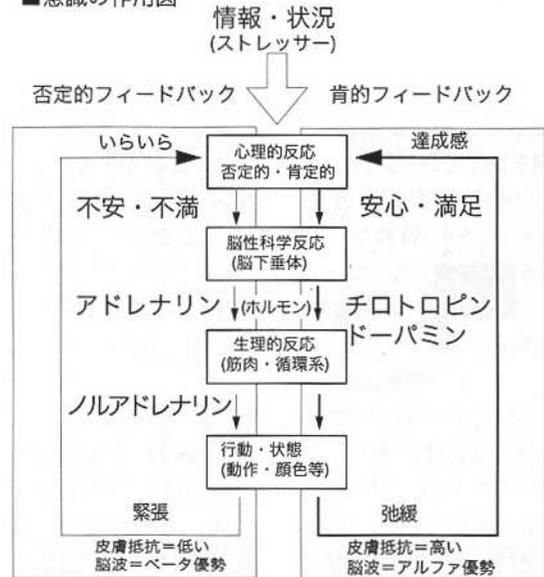
自我状態を知り、自分がどの自我が優勢になっているかを理解していれば、人と接するときに、この自我を調整することでスムーズなコミュニケーションを築くことができる。つまりストレスの発生しにくい状態をつくることができるのだ。

エゴグラムは相手を変えることより、まず自分に気づき、自分を変えることから始まる。

自我を調整するためのポイント

「自分を変えようといわれても、嫌いなものは嫌い、ダメなものはダメなんだ」という人も多いのではないだろうか。このような場合に是非実行してもらいたいののが、「アルファ波」を指標としたメンタルトレーニングだ。先に解説した、バイオフィードバック装置の中には、アルファ波の状態を、フィードバックする装置も販売されてい

■意識の作用図



るので、これらを利用するのも便利だが、リラックス状態に気づけば、この状態が「アルファ状態」になるので、この方法を習得することによって、装置を使用しなくても実行できる。

アルファ波が出ている状態で、「こうなりたい」という願望 (自我状態の修正された) イメージを思い描く。たとえば、嫌いな上司とにこやかに会話をしているイメージ、プレッシャーになっている仕事をうまくやりとげた肯定的なイメージを想像する。そうするとその映像が「潜在脳」にプログラムされて、脳はプログラムされた情報を実現するために、有効な信号を発信することになる。

「嫌いだ」「ダメだ」と思っている状態では、脳波は「ベータ波」が優勢となり、イライラして集中力がなく、大事な場面で実力が発揮できない。この状態では、意識レベルの神経回路と、潜在意識の神経回路がバラバラに分散してしまうので、願望はなかなか達成できない。

理想的なストレス対処法は、

1. 自分の自我状態を知る。
2. リラックスした「アルファ状態」を作る。
3. 理想の情景をイメージしたメンタルトレーニングを行う。

以上の3つを組み合わせることがポイントとなる。

今回は、実際にエゴグラム分析を行い、自分の傾向を探ることにしよう。

親と子のアルファトレーニング

登校拒否の話をよく聞きます。小学生や中学生、高校生や大学生まで年齢が幅広く、それぞれ深刻な問題を抱えているようです。最近では学校の先生や社会人の入社拒否など、協会の事務局への電話相談まであって、あまり特殊なものではなく身近にいくらでも起こりそうな現象になってきました。

SRPセミナーに参加して、登校拒否の問題をみごとに解決したケースを参考までにご紹介しましょう。

高校2年の息子さんが半年ほど学校へ行かず、お母さんは担任の先生や教育相談所を尋ねて指導をあおぐのですが、一向に改善されず困りはててのSRPセミナー参加でした。登校拒否の本人がSRPセミナーに参加してもらうのが手っ取り早いのですが、そうはいきませんから、お母さんがメンタルトレーニングを行うことになります。

いろいろお母さんの話を伺うと、本当に心配で、息子の将来を考えると不安で眠れない毎日だそうです。それにもかかわらず母親にものを投げたり、暴力を振るい、罵声を浴びせるものですから、だんだん憤りを感じるようになってしまい、解決の拠り所がなくなりました。

穏やかに話をして説得しようとするのですが、決まらずに口論となり憎らしくなってしまうそうです。もうこうなると理屈ではなく条件反射の反応です。お互いに顔をあわせると、お互いの声を耳にすると、本人の意に反して反射的に怒りと憎しみが出てきてしまうのです。

「可愛さあまって憎さ百倍」というように、相手のことをひたすら思っているのに、その意に添わないと、普通なら見逃せるような些細なことでも、大袈裟に感じて許せなくなるものです。

親子の問題に限らず、親友や恋人同士、嫁・姑の関係でよくあることです。そのようなときこそメンタルトレーニングが有効なのです。メンタルトレーニングの目指すものは、いついかなる状況においても、心穏やかに考え、対処できる状態をつくりあげることにあります。

しかも、意識してそうするのではなく、無意識で反射的に穏やかな気持ちで接することができる自分の心をつくらなければなりません。でも、それは決して難しいことではありません。梅干しを食べていると、やがて

梅干しを想像しただけで唾液が出てくるというパブロフの条件反射を思い浮かべてください。

脳は条件反射学習していますが、逆の条件づけができることも分かっています。つまり、唾液が出ているときに何かを想像すると、やがて想像したのを見たと反射的に唾液が出てしまうのです。

気分のいいとき、手やおなか暖かく、額が涼しく感じられるような「頭寒足熱」の体が絶好調で頭が冴えているとき、恐らくα波が強く出ていることでしょうから、そのようなときに登校拒否の息子の顔や姿、動作などをイメージします。

当然、不安や憤りを感じずことでしょ。そうしたら気分転換して気持ちが収まってからイメージし直します。不安の気持ちのままにイメージしないでください。穏やかな心の状態を作るためのメンタルリハーサルです。なにごともしハーサルをつめばうまくいくものです。その上にたつて、元気に学校へ通い、勉強に集中している息子の姿を想像します。元気にスポーツに打ち興じ、友達と和気あいあいにすごしている様子も想像してみます。

ほとんどのお母さんが、勉強ができて多くの友達から慕われている息子の姿が想像できないかも知れません。だからこそメンタルトレーニングを行い、我が子の喜びの姿が想像できるようにしなければなりません。これだけで、本当にこれだけで、想像した通りに登校拒否の問題が見事に解決され、翌年、希望の大学に現役で合格するというおまけまでつきました。



●8月10日(土)午後1時～3時まで、渋谷東急BEで「親子のためのコミュニケーションセミナー」を開きます。関心のある方はご参加ください。

●問い合わせ
東急BE担当 横田/Tel 03 3477 6277

応援します、あなたのアルファライフ。

■ ストレスマネジメント

¥18,000 税別

(CD-ROM)

ゼネフ
Zeneph.st



- MS-Windows3.1:マルチメディア型パソコンで動作するCAIです。
- エコグラムによるストレスチェックを行い、分析結果をグラフ表示と音声でアドバイスします。
- 分析結果に応じたメンタルトレーニングが音楽とナレーションで実行されます。
- BMI(別売)を使うと脳波も詳細に分析できます。

■ BMI(フレイシ・マシン・インターフェイス) ¥98,000 税別

パソコンで脳波をみる

Windowsで動作するパソコンのシリアルポートに接続して脳波を測ることができます。

α 波・ β 波・ θ 波など詳細に分析します。



■ システム内容

インターフェイスモジュール	1台
脳波センサーバンド	1個
ACアダプター	1個
脳波分析簡易ソフト	フロッピーディスク 3枚
マニュアル	

詳細はお問い合わせ下さい。

*BMIはMS-WINDOWS3.1と95で動作します。

■ マイ・マイトレーナ α X

¥38,800 税別

好きな音楽を聴くだけで、頭が良くなる!!

α 波同期誘導効果デバイス

- インナーモードorアウターモードにより α ・ θ 波が誘導。
- 好きな音楽をバイオサウンドに変換。
- Depth機能(増幅機能)を採用。



[仕様]

外形寸法:79(W)×116(W)×21(H)mm

重量:100g

電源:単3電池2本、DC6V 50mA

付属品:ヘッドホン・単3電池2本・ACアダプター
取扱説明書・保証書

■ アルファトレーナ

¥58,000 税別

ポータブルな個人向けバイオフィードバック装置



- アルファ波の強弱を2段階フィードバック音と5段階レベルバー表示で確認。
- トレーニングタイムとアルファ波積算タイムのデジタル表示でトレーニング効果を一目で把握。
- 2段階レベル切替スイッチにより、さらに高度なトレーニングが実現。
- アルファ波以外のノイズを赤色LEDバーが表示。正確な脳波測定が可能。
- どこでも気軽にトレーニングができるよう単3電池4本で可動。

[仕様]

外形寸法:120(W)×135(W)×35(H)mm

重量:0.5Kg

感応周波数:アルファ:8~14(Hz)

測定感度:Lo:7.5~15 μ v、Hi:15~30 μ v

▼お申込み方法

アルファサイエンス協会にご連絡の上、下記口座にお振り込み下さい。お振り込みを確認次第、商品を送付いたします。

【富士銀行 目白支店(普通口座) 1913387アルファサイエンス協会】

クレジットご希望の方は電話でご連絡下さい。申込み用紙をお送り致します。

INFORMATION

SRP 公開セミナー

Self Regulation Program(自己恒常性開発プログラム)はアルファ波やシータ波を指標にして自己恒常性を高め、能力開発に必須の健康と集中力の向上を図ります。

▼ベーシック (6時間)

1. 心と体の心理・生理学
2. 自我状態の分析
3. リラクゼーション練習
4. アルファ波の強化練習
5. イメージ強化 (右脳の活性化)
6. 脳へのプログラミング (願望実現法)

▼日 程 (10:00~17:00)

- 7月27日(土) 諏訪 昇 講師
 8月10日(土) 山崎 敏光講師
 9月21日(土) 浅海 維元講師
 11月10日(土) 山田 征礼講師
 12月21日(土) 大滝 茂男講師

▼アドバンスド (6時間)

1. アルファ波の測定
2. アルファ状態の作用力 (創造力)
3. 心と体のリズム (体内時計の活用)
4. 夢の活用
5. シータ状態での作用力 (勤と閃き)
6. 「気」のコントロール

▼日 程 (10:00~17:00)

- 10月 5日(土)
 11月 17日(土)
 【講 師】 志賀 一雅

▼受講料

- ベーシック ￥18,000 (消費税別￥540)
 アドバンスド ￥18,000 (消費税別￥540)
 再受講 ￥2,000 (消費税別￥60)

▼会 場

池袋メトロポリタンプラザ
 12F [会議室]

▼SRP インストラクターコース

公開セミナー(ベーシック/アドバンスド)を受講された方の中から、SRPセミナーの講師として活躍していただくために、指導法のポイントをお伝えするセミナーです。受講後資格認定試験に合格し、協会に指導員として登録されると、アルファサイエンス協会の講師として、SRP公開セミナーや企業研修でSRPセミナーを実施することができます。

▼内容 (各2時間)

1. 大脳の心理生理学
2. 心理検査法概論
3. 成功のメカニズム
4. 目標達成法
5. 指導技法 1
6. 指導技法 2

▼会 場

池袋メトロポリタンプラザ
 12F [会議室]

▼受講料

- ◆インストラクターコース
 ￥78,000 (消費税別￥2,340)
 ◆再受講
 ￥5,000 (消費税別￥150)

▼日 程 (10:00~17:00)

- 第1回 5月 5日(土) ~ 5月 6日(日)
 第2回 8月31日(土) ~ 9月 1日(日)
 第3回 11月 3日(土) ~ 11月24日(日)

第一回

公認インストラクターご紹介

佐藤 義雄	山田 征礼
浅海 維元	矢澤 敦臣
浅川 良雄	田中 秀和
大滝 茂男	中郡 聡
田山 恵一	堤繁 治
来栖 規子	諏訪 昇
山崎 敏光	須之内 守正
藤田 完二	

* 敬称略順不同

▼お問い合わせ

アルファサイエンス協会
 〒161 東京都新宿区下落合3-17-40
 TEL03-3565-0374 FAX03-3565-0335

▼振込先

富士銀行 目白支店 普通口座 1913387
 アルファサイエンス協会

アルファサイエンス協会のご案内

設立の趣旨

人間の本来もつ目標達成、願望実現、課題解決へ向けての知恵、意欲、力を発揮する機能、健康維持力、超感覚的知覚力、超科学的な作用力をもつ脳の働きを、アルファ波を指標にして現象論的に観察し、現代及び近未来社会において、これらの脳力をいかにして回復させ、新たに開発するかの方法を、広く世の中に提示することは意義深いと考えます。そこで、アルファ脳波をキーワードにした便乗商法が氾濫している現状に鑑み「真実一路」「真実不慮」の精神で相互研鑽を図り、真実を提供できる団体の組織化を提案します。

目的

1. 脳力開発研究所が開発したSRPセミナー「アルファ波を指標にした脳力開発法」の科学的な研究と応用を広く普及させる。
2. 会員相互の交流と情報の交換を図る。

事業

1. SRPセミナーの開催
2. SRP関連の商品の開発及び販売
3. SRPセミナーの指導員養成と資格認定
4. 指導員の活動支援
5. 機関紙「アルファサイエンス」の発行
6. マインドシンポジウムの開催
7. 情報交換ネットワークの運営

会員

1. 一般会員：機関紙「アルファサイエンス」の購読者
2. 正会員：SRPセミナーの受講者で入会希望者
3. 指導員：SRPセミナー指導者講座を受講し指導者として協会から認証された者
4. 団体会員：本会に賛同する法人、団体

入会

入会を希望した者が理事会の承認を得て、所定の入会金、年会費を納めることによって本会に入会できる。

年会費／入会金

1. 一般会員：¥3,000 / 無料
2. 正会員：¥4,000 / ¥3,000
3. 指導員：¥4,000 / ¥3,000

会員の権利

1. 一般会員 「アルファサイエンス」の配布
協会主催のイベントへの割引参加
2. 正会員 「アルファサイエンス」の配布
協会主催のイベントへの優待
協会販売商品の割引購入
SRP指導員講座への参加
3. 指導員 「アルファサイエンス」の配布
協会主催のイベントへの招待
協会販売商品の割引購入
SRPセミナーの開催
4. 団体会員 「アルファサイエンス」の配布
協会主催のイベントへの優待
協会販売商品の割引購入
社内研修でSRPセミナーの実施

組織

本協会に事務局を置き、理事会と評議会で決定した事項を執行する。評議会は指導員で構成され、理事会は協会長が推薦し、評議会で承認された理事で構成される。

SRPセミナー

- | | | |
|-----------------|------|------------|
| 1. ベーシックセミナー | 6時間 | ¥18,000.- |
| 2. アドバンスドセミナー | 6時間 | ¥18,000.- |
| 3. 指導員養成講座 | 12時間 | ¥18,000.- |
| 4. 指導員認定／登録料として | | ¥100,000.- |

協会役員

会長	志賀 一雅	理事	橋本 政和
理事長	山崎 敏光	理事	諏訪 昇
副理事長	山田 征礼	理事	高橋 慶治
副理事長	浅海 維元	理事	西 宏祐
理事	大滝 茂男	理事	矢澤 敦臣
理事	片山 博文	事務局長	田中 秀和

アルファサイエンス協会事務局

〒161 東京都新宿区下落合 3-17-40
TEL: 03-3565-0374 FAX: 03-3565-0335

1996年7月20日発行
VOL.13 NO.2 通巻52号
編集人／西鳥羽 由喜枝
発行人／志賀 一雅
発行／アルファサイエンス協会
〒161 東京都新宿区下落合3-17-40
TEL 03 (3565) 0374
FAX 03 (3565) 0335
印刷／古沢印刷株式会社

